

令和7・8年度北薩地区指定協力校

1年次研修のまとめ

【 研究主題 】

自ら学びを進める子供の育成

～学習者主体の授業の充実を目指して～



薩摩川内市立平佐西小学校

I 研究主題

自ら学びを進める子供の育成 ～学習者主体の授業の充実を目指して～

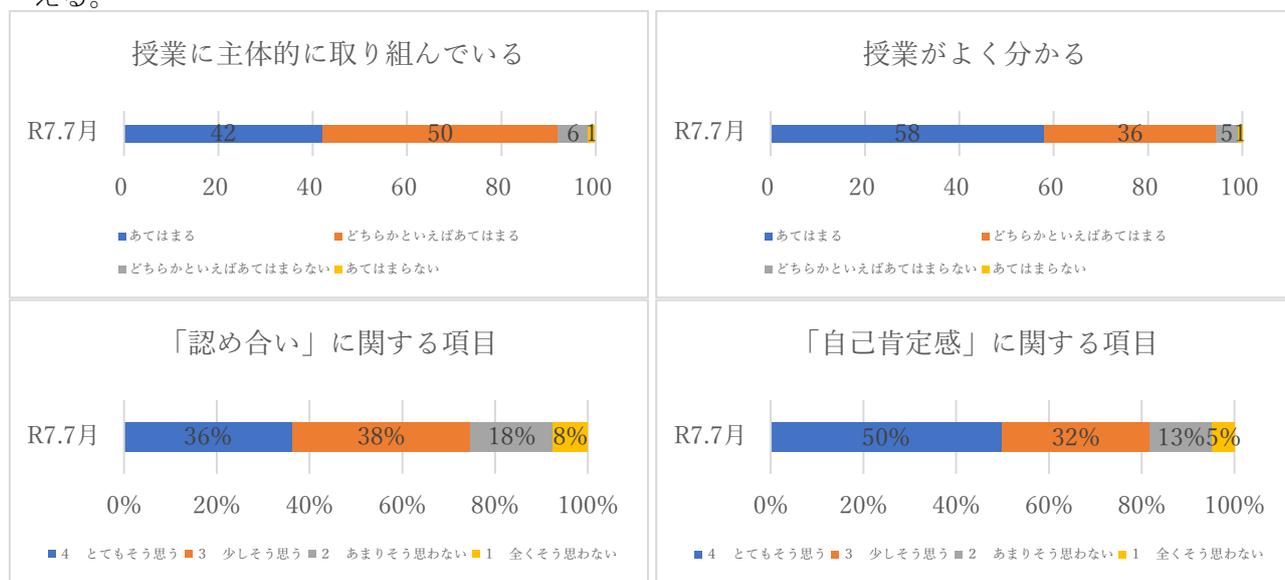
II 主題設定の理由

子供たちが活躍していくこれからの時代では、社会構造が大きく変化して、予測が困難な時代になる。そのため、一人一人が多様性を認め合いながら新たな価値を生み出していくことが期待されている。このような時代になるからこそ、様々な変化に向き合えるようにしたり、他者と協働して課題を解決したり、個別最適な学びを確保したりすることが重要である。

本校の子供たちは、NRT（教研式標準学力検査）において、知識・技能や思考・判断・表現などの資質・能力は、国語科や社会科、理科においては全国平均を上回っているものの、算数科においては全国平均と変わらない数値へと下がってきつつある。また、子供たちへのアンケート調査結果（図1）によると、「授業に主体的に取り組んでいる」が42%、「授業がよく分かる」が58%等主体的に学習に取り組む態度や子供たちの授業の理解度に課題がある。さらに、「学校楽しい～」のアンケート結果より、「認め合い」の項目が36%、「自己肯定感」の項目が50%、「支え合い」の項目が60%、「協働性」の項目が63%等、「認め合い」や「自己肯定感」が低い実態が明らかとなった。

そこで、子供たちが授業に対する主体性や理解度を高めるための手立てを追究することで、教師の授業改善へつながり、子供たちの学力も向上するのではないかと考え、研究主題を「自ら学びを進める子供の育成～学習者主体の授業の充実を目指して～」として研究を進めていくこととした。

研究主題の自ら学びを進める姿（図2）とは、自らの課題に気付き、意欲的に課題解決へ向けて自ら選択したり決定したり、他者と協働したりして、「わかった」「できた」と実感をもち学び続けることである。また、学習者主体の授業とは、子供たちが生き生きとチャレンジする授業である。そのためには、様々な教科の授業において、子供に学びを委ねる授業（子供が選ぶ・決める学び）づくりが必要となる。そこで、単元全体を見通して、自分たちで学習過程を決めさせたり、他者と交流できる環境を工夫したり、単元を通した振り返りをさせたりする。これらの実践により、自分たちの成長が実感しやすくなり、他者との交流で新たな価値観に気付き、学習過程が自分ごとになっていく。このことが、自分たちで学習していこう、最後までやり抜こうとする姿につながると考える。



【図1 子供たちへのアンケート結果】

自ら学びを進める子供の育成 ～ 学習者主体の授業を目指して ～

【高学年】

提示された課題に対して、**これまで学習してきた手段を想起(活用)**して、自身に合った解決方法を見出したり他者の考えにも関心をもって、協働的に解決したりすること

【中学年】

提示された課題に対して、**決められた手段や推測した手段の中から**解決に向けて自己解決したり、協働解決したりすること

【低学年】

提示された課題に対して、**決められた手段の中から**解決に向けて自己解決したり、協働解決したりすること

※手段・・・学習者が選択する視点「道具・活動」「学習形態・スタイル」「学習時間・スペース」「解決方法・考え方」「課題・めあて」と捉える。

【図2 発達段階に応じた「自ら学びを進める姿」】

Ⅲ 研究の視点・項目

【視点1】

見方・考え方を働かせながら自己選択・自己決定ができる授業づくりを行えば、自ら学びを進める子供を育成することができるのではないか。＝ **授業の充実**

【項目】

- (1) 見方・考え方を働かせながら、課題解決に向かおうとするための手立て
 - ① 「めあて」の自覚化
 - ② 解決の見通しをもつ場面の設定（内容面・方法面）
- (2) 見方・考え方を働かせながら、自らの学習を調整したり、他者と協働したりするための手立て
 - ① 子供に委ねる（学習者が選択する）場面の設定
 - ② 視点を明確にしたペアやグループでの対話・練り上げ
- (3) 見方・考え方を働かせながら、分かった・できた、もっとやってみよう
と実感できるための手立て
 - ① 子供の言葉による「まとめ」と「振り返り」（内容面・方法面）
 - ② 指導事項が身に付いたかどうかの確実な見届け

【視点2】

教師が主体的に学び合う校内研修を充実させれば、学習者主体の指導法や授業改善が図られ、自ら学びを進める子供を育成することができるのではないか。＝ **校内研修の充実**

【項目】

- (1) 授業について語る場の設定
 - ① 語る場の具体的な実施方法
- (2) 教師自身の課題を解決するための一人一授業の実施
 - ① 一人一授業へ向けた具体的な取組
 - ② 中間報告会・最終報告会の実践
 - ③ 学年会等での教材研究

IV 研究の内容

1 見方・考え方を働かせながら自己選択・自己決定ができる授業づくりを行えば、自ら学びを進める子供を育成することができるとは？

本校では、児童の実態や職員の願い、S E T加配担当教員配置校として英語学習の先進的実践を発信する学校として、算数科と英語活動・英語科（本市は、教育特区指定を受けているため、外国語活動・外国語科を英語活動・英語科と設定）を中心に研究を進めている。これらの教科の研究を進めるにあたり、特に大切になってくる「見方・考え方」を教科ごとに整理していく。

(1) 算数科における見方・考え方

『小学校学習指導要領解説 算数編』や「数学的な見方・考え方を働かせる算数科の『探究的な学習』」、「子供一人一人が自らの可能性を發揮する学びの実現Ⅱ～学習者主体の授業デザインを通して」では、次のように整理されている。

「小学校学習指導要領（平成29年告示）解説 算数編」より

- 数学的な見方
事象を数量や図形及びそれらの関係についての概念等に注目してその特徴や本質を捉えること。
- 数学的な考え方
目的に応じて数、式、図、表、グラフ等を活用しつつ、根拠を基に筋道を立てて考え、問題解決の過程を振り返りなどして既習の知識及び技能等を関連付けながら、統合的・発展的に考えること。



加固希支男著「数学的な見方・考え方を働かせる算数科の『探究的な学習』」より

- 数学的な見方
問題を解いたり、まとめたり（統合）、高めたり（発展）、学習の目的を自覚したりするための**着眼点**
- 数学的な考え方
根拠を基に筋道立てて考えたり、まとめたり（統合）、高めたり（発展）するといった**思考方法**



鹿児島市立田上小「子供一人一人が自らの可能性を發揮する学びの実現Ⅱ～学習者主体の授業デザインを通して～」（算数科）より

数学的な見方	単位に着目	量を表す単位だけでなく、ある数量を表す際の「基準となる量」に着目する
	集合に着目	ある観点から抽象したり捨象したりして分類した際の観点に着目する
	構成要素に着目	図形を構成する辺や頂点、面、角、式を構成する数や演算記号に着目する
	きまりに着目	計算で成り立つ法則や図形で成り立つ性質、変化や対応の規則性に着目する
	関係に着目	全体と部分の関係にある数量の関係や、図形間関係に着目する
	表現に着目	言葉、図、数、式、表、グラフといった数学的な表現に着目する
	傾向に着目	目的に応じて集めたデータを分析・表現し、特徴に着目する
数学的な考え方	帰納的な考え方	少数の事例で成立したことから規則性を見だし、一般的な結論を導く
	類推的な考え方	既知の事柄を想起し、同じように成り立つのではないかと思考を進める
	演繹的な考え方	すでに分かっていることを基にして、いつでもいえることを主張する
	統合的な考え方	ある概念や性質などを、より広い範囲で適用できるように捉え直す
	発展的な考え方	見いだした概念や性質などを、新たなものに創造し発展させようとする
	一般化の考え方	解決したことを基にその問題を含む集合全体で成り立つ一般性を見いだす
抽象化の考え方	いくつか性質の共通性を抽象したり、共通でないものを捨象したりする	

(2) 英語活動・英語科における見方・考え方

「小学校学習指導要領解説 外国語活動・外国語科」の目標を以下に述べる。

【小学校外国語活動 目標】

外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせ、外国語による聞くこと、話すことの言語活動を通して、コミュニケーションを図る素地となる資質・能力を次のとおり育成することを目指す。

【小学校外国語科 目標】

外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせ、外国語による聞くこと、読むこと、話すこと、書くことの言語活動を通して、コミュニケーションを図る基礎となる資質・能力を次のとおり育成することを目指す。

【外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方】

「外国語で表現し伝え合うため、外国語やその背景にある文化を、社会や世界、他者との関わりに着目して捉え、コミュニケーションを行う目的や場面、状況等に応じて、情報を整理しながら考えなどを形成し、再構築すること」

【外国語によるコミュニケーションにおける見方】

外国語によるコミュニケーションによる見方とは、外国語やその背景にある文化に着目すること

社会や世界、他者との関わりの点から捉える。例えば、街中の広告の看板を見たとき、書かれている外国語や描かれている文化は、社会や世界の中でどのような意味をもっているのか、また人々にどのようなメッセージを伝えるのかという点に注目しながら見ることができるようになる指導が重要。

【外国語によるコミュニケーションにおける考え方】

外国語によるコミュニケーションにおける考え方とは、コミュニケーションを行う目的や場面、状況等に応じて、情報を整理しながら考えなどを形成し、再構築すること

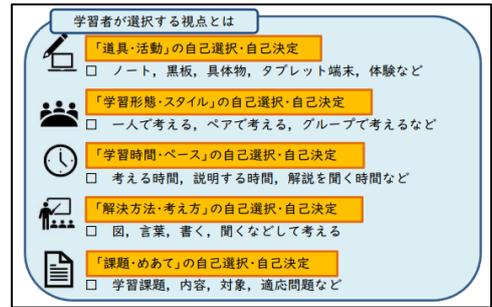
例えば、1年間一緒に学んできた友達に自分のことをもっと知ってもらおうという「目的」で考える。1年間一緒に学んできた友達に伝えるという「状況」を意識しながら、何を伝えたら良いかを整理したり、どのような言葉を用いることが適切なのかを考えたりすることができるようになる指導が重要。

【外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を育成するために】

- 1 言語の使用場面・場面設定を明確にして、その場面に適した内容や表現を考える。
 - (1) 児童の身近な暮らしに関わる場面
 - ・ 家庭での生活、学校での学習や活動、地域の行事
 - (2) 特有の表現がよく使われる場面
 - ・ あいさつ、自己紹介、買い物、食事、道案内、旅行
- 2 コミュニケーションを行う目的や場面、状況を工夫する
 - (1) 目的を明確にさせる。
 - ・ 「～さんに感謝を伝えよう」「～さんを褒めるために～さんの好きなところを伝えよう」
 - (2) 状況設定をはっきりとさせる。
 - ・ コミュニケーションを行う相手は誰か（友達、先生、初めて会う人）
 - ・ コミュニケーションを行う際に用いるツール（情報機器、絵やイラスト）
 - (3) その他の条件
 - ・ 一対一のコミュニケーション？ クラスの前で発表？ 準備する時間は？
 - ・ 即興的なコミュニケーション？

(3) 自己選択・自己決定

「学びの羅針盤」(2025: 鹿児島県教育委員会)では、学習者が選択する視点を5つ設定している。学習指導要領では、「単元など内容や時間のまとまりを見通して、その中で育む資質・能力の育成に向けて、児童の主体的・対話的で深い学びの実現を図るようにすること」の記述があることから、単元全体を見通した上で、子供たちが選択する場面を設定した授業づくりを目指していく。



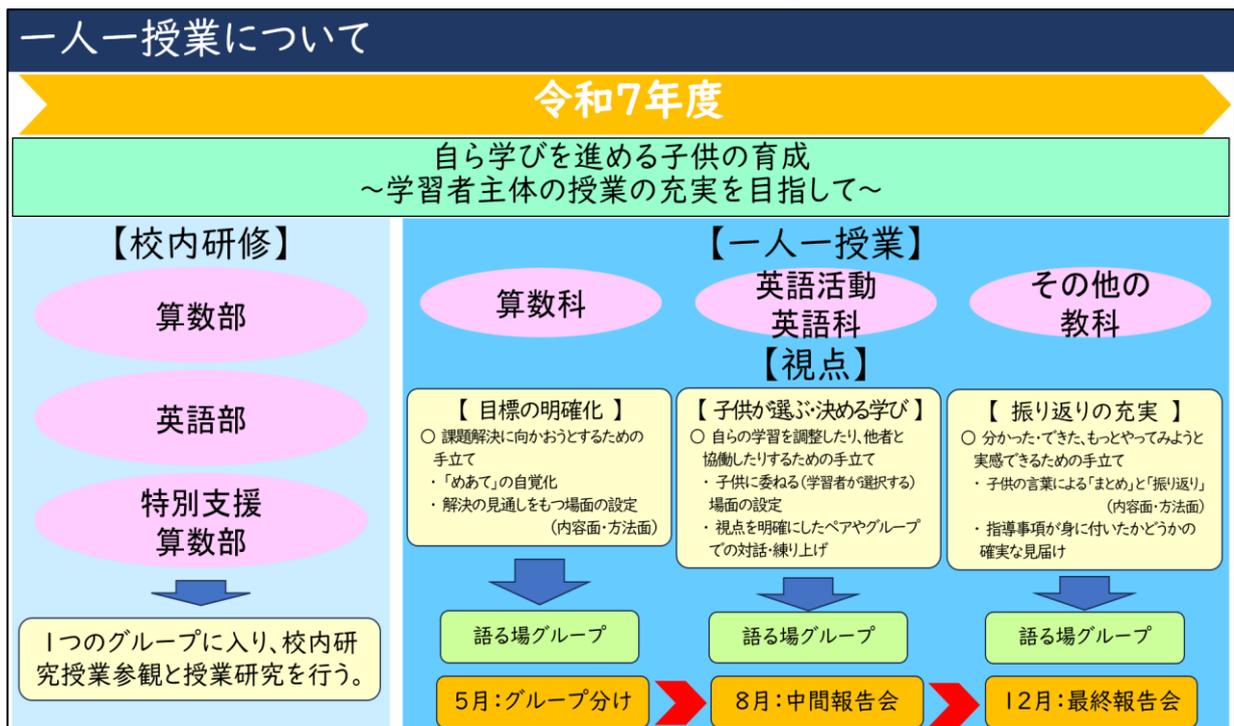
【学習者が選択する視点(学びの羅針盤より)】

2 教師が主体的に学び合う校内研修の充実とは？

令和答申では、「教職生涯を通じて探究心を持ちつつ、自律的かつ継続的に新しい知識・技能を学び続け」ている教職員の姿を、児童生徒の伴走者と表現し、学び続けることの大切さを説いている。また、今後の教職員集団の持続的な成長に着目し「学び続ける教職員集団」について以下の3点に整理されている。

- ① 『教職員同士』の学び合いの文化をつくり、教師それぞれの強みや専門性を引き出し、相互にかけ合わせることで、集団の力を最大限に高めていくこと。
- ② 学校の教育課題に即した校内研修や授業研究などの日常的かつ組織的な学びを実践すること。
- ③ 安定して建設的な批判や助言、提案を行うことができる校内環境を整え、職場での対話や連携、協働による問題解決が促進されるような学校組織マネジメントを行うこと。

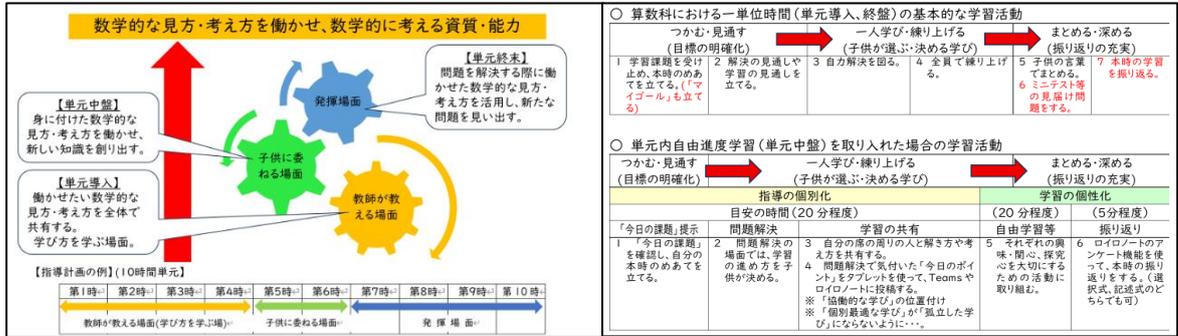
本校においても、これらの視点を基に「子供の学びと教師の学びは相似形」を捉え、令和6年度の校内研修テーマを「学習者主体の授業充実を目指して～教師が主体的に学び合う校内研修への転換～」と設定し、授業について語り合う場、一人一授業、校内研究授業等を行ってきた。令和7年度においては、この実践を基に新たな校内研修テーマや研究の視点を盛り込んだ実践に取り組み、教師が主体的に学び合う取組を進めていく。



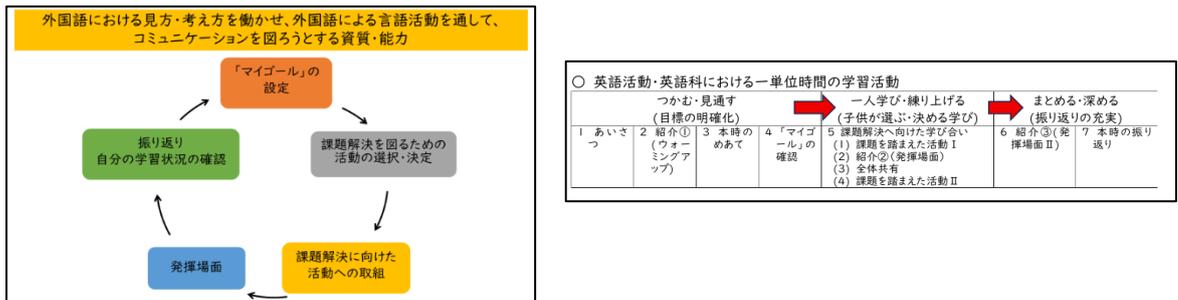
V 研究の実際

1 見方・考え方を働かせながら自己選択・自己決定ができる授業づくり

本校研究テーマである「自ら学びを進める子供」を育成するためには、前述の各教科の見方・考え方を基にして、「45分で作る授業」から「単元全体で作る授業」を意識し単元全体を見通した指導計画の作成を行う。また、児童の実態を確実に把握しながら、一斉学習や一部学年で始まっている自由進度学習も視野に入れながら以下の実践に取り組んでいく。なお、令和7年度が地区指定1年目であるため、研究の視点1の項目1～6から、研究の授業者が学級の実態に応じた視点を選択して研究授業を行い、実践を深めていくこととした。



【図3 算数科における見方・考え方を踏まえた学習活動の位置付け】



【図4 英語科・英語活動における見方・考え方を踏まえた学習活動の位置付け】

項目	学習形態(※1)	
	一斉学習	自由進度学習
(1) 見方・考え方を働かせながら、課題解決に向かおうとするための手立て		
① 「めあて」の自覚化 ○ 子供の言葉を使って「めあて」を立てたり、マイゴールを設定させたりする。	◎	◎
② 解決の見通しをもつ場面の設定(内容面・方法面) ○ 解決すべき内容や方法を考える場を設ける。	◎	◎
(2) 見方・考え方を働かせながら、自らの学習を調整したり、他者と協働したりするための手立て		
③ 子供に委ねる(学習者が選択する)場面の設定 ○ 子供一人一人が選択する視点を明確にもっているか確認する。	○	◎
④ 視点を明確にしたペアやグループでの対話・練り上げ ○ 何を話し合うのか、どのように考えたのかを伝え合い、多様な考えを基に考察する。	◎	○
(3) 見方・考え方を働かせながら、分かった・できた、もっとやってみようと思えるための手立て		
⑤ 子供の言葉による「まとめ」と「振り返り」(内容面・方法面) ○ 子供の言葉で立てた「めあて」に対する「まとめ」を考えさせる。 ○ 「わ・が・と・も」、学習内容や方法を中心に振り返りを書かせる。	◎	○
⑥ 指導事項が身に付いたかどうかの確実な見届け(※2) ○ 適用問題を確実にこなせ、理解できているかどうか確実に見届けたり把握したりする。	◎	◎

【表1 研究理論における一斉学習と自由進度学習の整合性について】

※1 学習形態(◎:研究内容に合致、○:どちらかといえば合致)

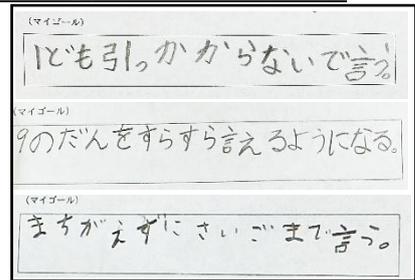
※2 見届け=授業の内容理解の確認、進捗状況の確認の2つを含む(北薩教育事務所資料:「見届け」=できることの確認)

(1) 見方・考え方を働かせながら、課題解決に向かおうとするための手立て

ア 「めあて」の自覚化

○ 子供の言葉を使って「めあて」を立てたり、マイゴールを設定させたりする。

右の写真は、2年生「かけ算(2)」の実践である。単元中盤の9の段を習得する場面である。前時に一斉指導で9の段を学習した後、自由進度学習を取り入れ、子供たち自身が「マイゴール」を立てて取り組んでいる。自分自身で立てた「マイゴール」があることで、振り返りも自分自身の学び方を振り返ることができ、子供たちが主体的に取り組むことができるきっかけとなった。



【2年生「かけ算(2)」マイゴールの一部】

イ 解決の見通しをもつ場面の設定 (内容面・方法面)

○ 解決すべき内容や方法を考える場を設ける。

ここでの「見通し(見通す)」とは、考えたことを実行にうつすための時間と捉える。内容については、それぞれの教科によるため、ここで位置付けることは難しいが、方法については、子供たちに考えさせる。

右の写真は、4年生「面積」の見通しをもつ場面である。内容面と方法面の見通しをもたせるためには、前時の振り返りが欠かせない。前時に学んだことを生かした上で、本時の学習へのきっかけにすることが重要である。



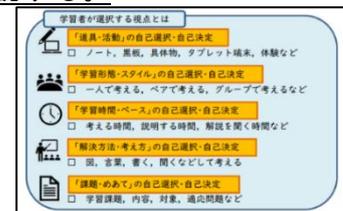
【見通しをもつ場面：4年生「面積」】

(2) 見方・考え方を働かせながら、自らの学習を調整したり、他者と協働したりするための手立て

ア 子供に委ねる(学習者が選択する)場面の設定

○ 子供一人一人が選択する視点を明確にもっているか確認する。

「道具・活動」「学習形態・スタイル」「学習時間・ペース」「解決方法・考え方」「課題・めあて」の5つの視点を子供一人一人が明確にもっているか確認する場は必要である。ワークシートに記入させたり、机間巡視をして確認したりするなど、選択させた後の見届けを確実に行うことで、自らの学習を調整することができる。



【学習者が選択する視点(学びの羅針盤より)】



【学習者が選択する場面の設定(実測・タブレット・プリント・先生と一緒に)】

上述4つの写真は、2年生「かけ算(2)」の授業場面である。9の段を習得するために、学習者が選択できる場の設定を行った授業である。実測する場面では、友達同士で話し合いながら9の段を習得する協働的な学びも見ることができた。

イ 視点を明確にしたペアやグループでの対話・練り上げ

○ 何を話し合うのか、どのように考えたのかを伝え合い、多様な考えを基に考察する。

前述の子供に委ねる場面と大きく関わるものである。右の写真は、4年生「面積」の学習で、一人調べが終わり、学び合う場面である。子供たちの理解に差があり、早く終わる子もいれば、一人で解決することが難しい子供もいる。どのように考えたのかを子供同士で伝え合い、多様な考えを基に、統合的・発展的に考察していく。



【一人調べ・学び合い場面：4年「面積」】

- (3) 見方・考え方を働かせながら、分かった・できた、もっとやってみようと思えるための手立て

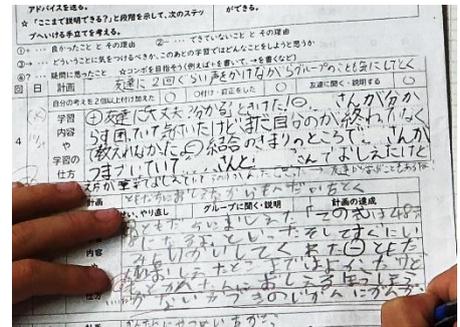
ア 子供の言葉による「まとめ」と「振り返り」(内容面・方法面)

○ 子供の言葉で立てた「めあて」に対する「まとめ」を考えさせる。

子供の言葉を使って立てた「めあて」に対して、子供自身で「まとめ」を書かせることで、授業内容を振り返らせる。その際、幾つかのキーワードを基に、キーワードをつないで「まとめ」を考えることで、本時の学習を確認させる。

○ 「わ・が・と・も」や、学習内容や方法を中心に振り返りを書かせる。

これまで、「分かったこと、がんばったこと、友達のよいところ、もっとやみたいこと」を中心に振り返りの視点を示してきた。この視点に加え、学級の実態に応じて、学習内容(大切な考え方、今までの学習との共通点、学んだ考え方を使うとどんなことができるか)や方法(自分が選択した学び方)についての振り返りや子供自身(個人)のめあて=マイゴールに関する振り返りができるとよい。そのスペースを振り返りシートに設けることで、教師側も学びの進め方や学びの現在地を把握することができる。



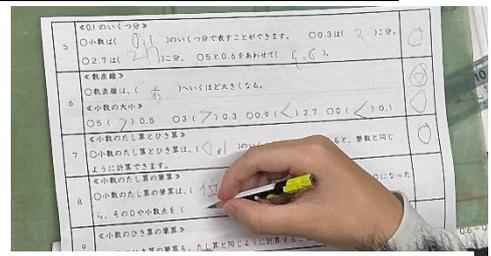
【4年生「面積」振り返りシート】

右の写真は、4年生算数「面積」の振り返りシートである。この時間は、マイゴールを立てて振り返りを記入させている。学習内容や学習の仕方について記入・提出させ、教師自身がコメントを次時までに記入して返却する。このような手立てを講じることにより、子供たちの学びの現在地を把握することができる。

イ 指導事項が身に付いたかどうかの確実な見届け

○ 適用問題を確実にに行わせ、理解できているかどうか確実に見届けたら把握したりする。

子供が自己選択したり、自己決定したりするなど、子供に委ねる授業づくりを進める中で、課題となることが見届けである。本時の学習がしっかりと理解できているのか、身に付いているのかを見届けたら把握したりする必要がある。そのために、web問題を活用したり小テスト等を実施したりして、子供の学びを確実に見届ける手立てをとる。



【3年生特別支援学級「小数」振り返りシート】

右の写真は、3年生特別支援学級(情緒学級)「小数」の振り返りシートである。毎時間、本時で扱った大切な言葉を穴埋め問題にしたり、教科書の練習問題を記載して応えさせたりしている。また、学びの理解度を◎、○を使って答えさせている。

2 校内研修の充実や職員のブラッシュアップ等の充実

(1) 授業について語る場の設定

ア 語る場の具体的な実施方法

本校では、「児童の学びと教師の学びは相形」の考えを基に、職員研修のスタイルを大きく変更した。そのポイントは、教師が授業について語る時間を設けることである。今年度は、5回を「語る場」として設定し、北薩の授業づくり3ポイントである目標の明確化、子供が選ぶ・決める学び、振り返りの充実から今年度実践していく視点の希望を取り、希望を基に編成した11グループで第1回「語る場」(R7.5.26)をスタートさせた。なお、校内研修理論を基に、教師自身が普段の授業で実践していく個人テーマを決め、授業づくりについて議論しながら実践していく場を設けた。



【第2回語る場(R7.7.23)】

(2) 教師自身の課題を解決するための一人一授業の実施

ア 一人一授業へ向けた具体的な取組

前述の語る場で議論して決めた個人テーマを実践する教科について、専科教諭や特別支援学級担任は、指導する教科が限られているため、個人の裁量に応じて教科を決めていくこととした。なお、一人一授業として、以下の2点を共通実践としてお願いした。この実践が、次項目の中間報告会・最終報告会へとつながっていく。

一人一授業		令和7年度R7.8.26	
1 発表者		1 議題の復習をする。 本時のめあてを確認する。	○ ~~~~するために、~~~する(させる)。 理由と手立てを一次で記載する。
2 目標		2 「個別最適な学び」(指導の個別化と学習の個性化、学習に繋がる)と「協働的な学び」の一体化を図る。	○ ~~~~するために、~~~する(させる)。 理由と手立てを一次で記載する。
3 本時	○/○	3 (各自で)本時のめあて(振り返り)をする。	○ ~~~~するために、~~~する(させる)。 理由と手立てを一次で記載する。

【一人一授業略案様式】

- ① 一人一授業を実践する1週間前を目安に、略案を作成し配布する(A4サイズ1枚)
- ② 授業の実践だけでなく、グループで議論した課題や解決策を中間報告会、最終報告会で発表する。

イ 中間報告会・最終報告会の実践

(7) 中間報告会(第3回語る場：R7.8.26)

中間報告会や最終報告会は、全教諭・講師が1人ずつ発表する形式をとった。発表は、一人一授業の視点に応じたグループ別とし、発表者は1人ずつ学習支援アプリやプレゼンテーションソフトのスライド機能を作成し、実践の意図、成果と課題等の実践が具体的に分かるように写真を用いながら発表した。なお、中間報告会では、1学期に実践を終えた先生は、成果と課題を報告した。2学期に実践を予定している先生は、単元名や授業づくりの視点を発表した。



【中間報告会(第3回語る場：R7.8.26)】

(4) 最終報告会(第5回語る場：R7.12.26)

これまでの4回の語る場で議論したり実践したりしてきた大きな節目となる最終報告会。この報告会までに、各グループで個別に集まり、打合せをしたりリハーサルをしたりするグループも多く見られた。特に、特別支援教育の発表については、通常学級でも生かすことのできる内容もあり、意義ある報告会となった。



【最終報告会(第5回語る場：R7.12.26)】

VI 研究の成果と課題

1 研究の成果

視点1	視点2
<ul style="list-style-type: none"> ○ 一斉学習の際は、子供の言葉を使った「めあて」、自由進度学習で進める場合は「マイゴール」として進めてきた。子供たちも少しずつ「マイゴール」を立てることができている。 ○ 子供に委ねる(学習者が選択する)場面の設定において、意図や目的をもって普段の授業実践に生かすことができた。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 語る場の設定と一人一授業の実践は、目的をもった授業改善に大きくつながり、同じ課題をもった先生同士で語り合えたことで先生方が主体的に取り組むことができた。 ○ 経験年数の浅い先生にとって、指導法を学ぶ場となっている。

2 研究の課題

視点1	視点2
<ul style="list-style-type: none"> ▲ 子供に委ねる(学習者が選択する)場面が多くなるほど、確実な見届けが難しくなる。紙媒体やノートを集めてチェックしたり、ICTを活用した習熟問題に取り組ませたりするなど、改善の余地が残る。 ▲ 研究授業で取り組むことができなかった項目を令和8年度の研究授業の視点として設定し、実践に取り組む。 	<ul style="list-style-type: none"> ▲ 中間報告会や最終報告会の在り方について、1人ずつの発表を全て聞くのではなく、関心の高い分野等、発表ブースを設けて発表できるとよいのではないかと感じた。